

社説

3Dプリンター

3次元CADのデータをもとに素材を1層ずつ積層して直接造形する3Dプリンターが急速に普及している。10万円台のローエンド機が登場して個人レベルまで広がってきた。製造分野におけるデジタル化の加速が、果たして日本のモノづくりの風景を変えるのだろうか。

求められる人材、中小企業への影響などを議論。年内に報告書をまとめる方針だ。

産業技術大学院大学の館野寿丈准教授は創造技術専攻が設置

技能とデジタルスキル融合を

された2008年から3Dプリンターを使ったモノづくりを指導している。修士2年の1年間は5〜6人のグループのプロジェクト演習としてモノづくりを実施。「3Dプリンターにより

限られた時間で、製品企画から概念設計、詳細設計、試作、修正のサイクルを何度も回せるのは教育には有利」という。

これによって学生の3DCA

ちろん製品の一部が置き換えられるようになると大きく普及するのではないか。日本のモノづくりを変えるだろう」とみる。

確かに以前のラビッドプロト

合わせた製品づくりに向いていそうだ。家電品などの補修部品やその金型の在庫を抱える負担を減らし、何十年たった製品にも部品を供給することができるようになるかもしれない。

も職人の技能がものをいう世界だ。得意分野にさらに磨きをかけて差別化したい。

一方で、3Dプリンターに限らず、モノづくりのデジタル化は進展していく。特に加工を得意とする中小企業にとっては職人の技能とともにデジタルスキルを身につけることも欠かせない。3Dプリンターと3Dプリンターに合った設計手法などのノウハウを習得し、従来の技能と組み合わせることによって新しいモノづくりの世界もみえてくるのではないだろうか。